

青銅武器からみた東周代長江中下流域の地域社会の 生成と展開

李, 寧

<https://hdl.handle.net/2324/7182267>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 李寧

論 文 名 : 青銅武器からみた東周代長江中下流域の地域社会の生成と展開

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、青銅武器を資料とし、東周代（春秋戦国時代）における長江中下流域の地域社会の生成と展開を明らかにすることを目的とする。春秋戦国時代、中原を中心とする青銅器文化が頂点に到達した一方で、周王朝政権は弱体化し、諸侯階層の自立的な成長と、覇権闘争が始まっていく。そうした諸侯国の自立化過程と、それに関わる地域間関係の変容の解明は、中国だけではなく東アジアの国家形成の問題を考える上でも不可欠である。

これまで東周時代の研究は文献や青銅礼器を資料とした研究が中心であって、軍事活動とそれに基づく地域間関係を示す青銅武器に特化した研究は少なかった。第1章では先学の成果を整理し、本論で目指す課題、及び本論における目的、方法を提示した。従来の諸研究から、中原を中心とする、「中心」-「周辺」という構造でみる限り、長江中下流域という「周辺」については、秦という中原王朝の政治的領域にいかに関わり込まれたかが主な問題とされる場合が多かった。しかしながら、長江中下流域が多様な伝統を持ちつつも、中原的な要素を受容し、楚という独特の伝統・政体を形成したことは、必ずしも明らかではなかった。そこで、本論文は東周時代における長江中下流域の青銅武器（劍・戈戟・矛・鏃）に基づいて、各地域の戦闘法を復元しつつ、地域間関係とその変遷および背景を解明することを目標とした。

第2章では、長江中下流域の武器との比較のため、中原地区における青銅劍・戈戟・矛・鏃を取り上げた。青銅武器の系譜関係としては北方系・中原系・呉越系が存在する。春秋前・中期に青銅武器は基本的に西周後期からの形態を引き継いでおり、画期である春秋後期には新系統である呉越式が出現する。戦国前期には歩兵用武器の種類が豊富になり、戦國中・後期には各種武器の数量は顕著に減少し、中央集権化により国による管理が強化されたと考えた。

第3章では、長江中下流域の代表的器種とも言うべき青銅劍を取り上げた。春秋前・中期には、各系統の青銅劍が各地域で出現し、地域性が明瞭である。春秋後期に、銅劍の実戦化が進み、地域間における武力抗争の激化を示している。戦国前期に入ると、銅劍の分布に斉一化が認められ、呉越式銅劍と中原式銅劍が「中国式銅劍」を形成したと考えられる。その後の政治的闘争の強烈化に伴い、歩兵武器としての「中国式銅劍」の種類はさらに豊富になった。

第4章では、青銅戈戟を検討した。春秋前・中期の漢水流域の青銅器武器は、中原に近い様相を示すが、長江下流域では西周後期に既に地域性が現れている。春秋後期には呉・楚戦争な

どのような政治的闘争の激化に伴って、呉越文化を示す戈・戟が淮河流域・長江中流域に拡散した。さらに戦国前期には、楚国による周辺諸国に対する滅国や遷徙という社会背景によって、各型式の戈・戟は分布上、斉一性を呈する。戦國中・後期に入ると、秦国による統一前夜の戦闘増加によって、各型式の戈・戟は漢水下流域や洞庭湖周辺を中心として分布するようになった。

第5章では、青銅矛の展開を検討した。春秋前・中期には、それぞれ異なる系譜の矛が、漢水流域・長江下流域・湘江流域の3地域に分布する。春秋後期～戦国前期では、長江下流域の呉越文化に由来する型式(E型)が、淮河流域や漢水流域に広がり、これは呉国の進軍経路と一致する。戦國中・後期には、従来湘江流域にあったF型が広く拡散し、楚との関連がうかがえる。

第6章では、青銅鏃を検討した。青銅鏃は鏃群Ⅰ・鏃群Ⅱという2鏃群に区分できる。春秋前・中期においては、鏃群Ⅰと鏃群Ⅱはそれぞれが湘江流域と漢水流域で集中して分布し、地域性が濃厚である。春秋後期に入ると、各鏃群の分布状況によって、地域間における交流が活発化する。戦国前期に入ると、一括遺物に基づくと、該当段階における鏃群Ⅰや鏃群Ⅱは長江中下流域で共有され、楚文化に属する。戦國中・後期では、前段階と同様に、鏃群Ⅰと鏃群Ⅱは楚文化のものであり、漢水流域や洞庭湖周辺を中心とした分布は、当時の政治的闘争の激化と関わる可能性が高い。

第7章では、第3章から第6章までをまとめ、長江中下流域の青銅武器の様相を3期4段階に区分した。その上で、各段階の分布に基づいて地域間関係を明らかにし、出土状況と武器組成から戦闘法の復元を行った。結果、地域間関係の変化は、当時の政治・社会状況と戦闘法の変化と密接に関連することが、以下のように明らかとなった。

春秋前・中期(第Ⅰ期)の長江中下流域では、各諸侯国により独自の青銅器が生産され、青銅武器にも楚(漢水流域)・呉越(長江下流域)・湘江流域という三つの地域性が認められた。春秋後期(第Ⅱ期第1段階)には、地域間における交流が活発化し、当該段階は大国の領域拡張による地域社会統合が開始された。戦国前期(第Ⅱ期第2段階)には、楚国は周辺諸国に対し、滅国及び遷徙を行い、地方行政を直接的に支配しはじめ、徐々に領域国家が形成され始めた。戦國中後期(第Ⅲ期)には、大規模な戦争が行われ、楚国独特の「郡県制」の成立をもって、長江中下流域における領域国家が成立したのであった。

中原を中心とする、「中心」-「周辺」という構造でみる限り、長江中下流域という「周辺」については、秦という中原王朝の政治的領域にいかにか組み込まれたかが主な問題とされる場合が多かった。しかしながら、本論で明らかにしたのは、長江中下流域が多様な伝統を持ちつつも、中原的な要素を受容し、楚という独特の伝統・政体を形成したことであった。そして、楚の広がりにも、中原秦の郡県制とは異なる支配体制が想定される可能性がある。このことは、中原を中心とする中国史観に一定の問題を投げかけるものであり、東アジアにおける多様な歴史プロセスを構築していく上で、重要な問題提起となるであろう。